

## 最優秀賞

### テーマ..医療と福祉、わたしの体験

### 『『寄り添う』医療』

千葉県・千葉敬愛高等学校3年 青木綾香

人間は命の始まりから終わりまで、多くの場面で医療の力に支えられている。自分だけではどうすることもできなくなった時、自分の大切な人が苦しんでいる時にも、私たちにとって医療の力は自然と必要不可欠な存在になっている。

高校一年生の春、私の父は肝臓がんで亡くなった。父は数回の入院と手術を乗り越えながら、約六年間懸命に闘病生活を続けた。病気が進行するにつれて、父は病気へのストレスからか、次第に頑固な性格へと変化していった。家庭で父の笑顔を見る機会は減り、それとは対照的に、病気に関する医療用語が多く飛び交うようになった。父が理学療法士、母が看護師ということもあり、医療知識がない人たちに比べると病気への理解が深かったのだろう。そんな状況を受けて、私は父の死を意識するようになっていった。今、当たり前のように近くにいる父と二度と会えなくなる日が来るかもしれない。そう考えると、現実を素直に受け入れていくことは難しかった。

私の心配をよそに、父はどんなに体調がすぐれない日でも辛いそぶりを見せることなく、毎朝自分を待つ患者さんの元へ仕事に向かった。私には父が何故そこまで他人に尽くせるのか理解することができなかった。自分の辛さを押し殺してまで他人のために働くこと。今考えるところでも立派なことのように思えるが、当時の私には、父にとって負担になるだけのように思えた。

父の病状は日に日に悪化していき、最期は母に看取られながら息を引き取った。悲しみと混乱で胸がいっぱいで、現実を受け入れられずにいた私に、

「お父さん、よく頑張りましたね」

と、父の担当医師が一言残していった。その瞬間、父の今までの頑張

り、日々弱っていく父を近くで見えてきた私たち家族の苦しみまでもが報われた気がした。それと同時に、父の「生きたい」という思いを全力で支えてくれた、病院の方たちに対しての感謝の気持ちでいっぱいになった。

父の死をきっかけに、医療職に興味を持ち始めた私は、父の勤務していた病院で職場体験をさせてもらった。父が担当していた患者さんと接する機会があり、お話を聞いた時、私の父の言った、

「一緒に頑張りましたよ」  
という一言で、

「自分は決して一人ではない。前向きに治療に向き合おうと思えた」と話してくれた。そして、父はいつも笑顔を絶やさず、周りを明るくできる人だったことも教えてくれた。その話を聞いた私は、医療にはする側がされる側から得るものもあるということに気づかされた。父は懸命に治療に取り組む患者さんから、生きる活力を得ていたのかもしれない。だからどんなに辛くても、患者さんの前では自然と笑顔になれたのかもしれない。父にとっての医療とは、ただ仕事であるということだけではなく、自分を支えてくれるものであり、辛い時や苦しい時に自分を元気づけてくれる、魔法の薬のようなものだったのだろう。

どんな状況であっても、その人の思いや感情は本人にしかわからない。例えば、病気の苦しみは実際の患者さんにしか感じられないし、それを支える家族の苦しみもその家族にしかわからない。しかし、医療にはその心に寄り添える力があると思う。大きく医療とまとめても様々な医療方法があり、人それぞれ希望することも違う。今の医療制度では対応できることにも限界がある。しかし私は、治療することだけが医療ではないと思う。治療する側とされる側にきちんとした信頼関係が築かれ、一人一人の心に寄り添えた時、初めて医療といえるものになる。それを気づかせてくれた父を誇りに思い、これからの医療を担う世代として「寄り添う医療」を広めたい。